

10/24

今こそ政治決断を!
JR採用差別問題の
解決要求
実現をめざす

中央大集会

10月24日(金)日比谷野外音楽堂

- 18:00開場 18:30開会
- 集会終了後、デモ行進を予定



呼びかけ人

私たちも
応援しています
(50音順)

両宮勉彦 (作家)

佐高 信 (評論家)

中山和久 (早稲田大学名誉教授)

片岡 具 (京都大学名誉教授)

下山房雄 (九州大学名誉教授)

萬井隆令 (慶応大学経済学教授)

鎌田 慧 (ルポライター)

芹澤寿良 (東京福祉大学名誉教授)

神田香織 (調教師)

塚本 健 (東京大学名誉教授)

主催 4者 (国労闘争団全国連絡会議 鉄建公団訴訟原告団 鉄道運輸機構訴訟原告団 全動労争議団・鉄道運輸機構訴訟原告団)
4団体 (国鉄労働組合 全日本建設交通一般労働組合 国鉄闘争支援中央共同 国鉄闘争に勝利する共同会議)
連絡先 港区新橋5-15-5 交通ビル4F 国労闘争団全国連絡会議 TEL.03-5403-1645

今こそ政治決断を! JR採用差別問題の 解決をはかれ!



国鉄労働者1047名問題は、現代のリストラの原点とも言われています。

闘う労働組合が次々と潰されて行く中で、貧困と格差が急速に広がり、労働・教育・医療・福祉・介護など、働く者の権利が後退させられ、ワーキングプアの増大、若者が職を求めても仕事がない、高齢者への医療費の負担増など、生存権そのものが脅かされています。

世界一安全・正確な運行を誇っていた国鉄が「赤字だから」と、分割・民営化で解体され、会社化されました。しかし、25兆5千億円だった赤字は、3兆円も増え国民負担に転嫁されました。国民の共有財産だった国鉄用地は、一部企業に破格の安値で売られ、地方路線ははがされました。JRの利益優先の経営は、重大事故を多発させることに繋がり、JR尼崎事故の大惨事は記憶に新しいところです。また、JR移行時に行われた国労や全動労などへの採用差別問題は、22年経った今も解決していません。

現在、鉄道運輸機構を相手としている訴訟では、2005年9月の鉄建公団訴訟判決に続き、本年1月23日の全動労訴訟で旧国鉄の不当労働行為を認定させる判決を勝ち取りました。しかし、3月13日の鉄道運輸機構訴訟は、不当労働行為に触れず「時効」で逃げる不当判決となりました。

こうした中、先行する鉄建公団訴訟控訴審(東京高裁第17民事部)で、7月14日、南敏文裁判長から原告、被告双方に「ソフトランディングできないか」と裁判外での話し合いが提案され、それを受けて、冬柴前国土交

通大臣は翌15日の閣議後の記者会見で「お受けし、その努力はすべき」と鉄道運輸機構が交渉に応じるよう促すとともに、「誠心誠意努力する」と政治的に踏み込んだ発言をしました。これまでの地を這うような闘いの積み上げで、現在、紛争解決に向けた当事者間の交渉テーブルが設置されようとしています。

こうした情勢の中で開かれる「今こそ政治決断を! JR採用差別問題の解決要求実現をめざす10・24中央大集会」は、被解雇当事者の要求に基づく内容で解決を求める大きなうねりをつくり上げることは勿論のこと、働く者の雇用と権利、平和と民主主義、安全・安心できる暮らしを保障させていくためにも、中央大集会への参加を心からお願い致します。

「JR採用差別」問題とは

1987年4月に、かつての国鉄(日本国有鉄道)が「分割・民営化」され、現在のJR会社になりました。当時の中曽根首相は「1人の職員も路頭に迷わせない」「所属労働組合で差別があってはならない」と国会で答弁。しかし、「分割・民営化」に反対していた国労や全動労に所属する職員に対して、当時の国鉄当局は白昼公然と不当労働行為を繰り返し、北海道・九州を中心に、約8千人近い国鉄職員が国鉄清算事業団に入れられました。そして、その内の1047名が3年後の1990年4月に解雇されました。解雇された国労や全動労の組合員は、闘争団や争議団を結成。現在、鉄道運輸機構(国鉄清算事業管理部)を相手とする訴訟で闘っています。

亡くなった夫に「解決したよ、私頑張ったよ」と報告したい 筑豊闘争団遺族 百崎節子

主人は2001年11月17日志半ばでこの世を去りました。死因は「心筋梗塞」でした。45歳という若さでした。「もう一度、列車の運転がしたいなあ」と常に主人は望んでいました。しかし、解決の日を待ち望み、頑張ってきた主人はその日を迎えることはできませんでした。解雇されて、本当に主人は苦しみ、そのことが心臓への負担につながったと思います。

主人を亡くし、義母・娘と私の三人となり「生活・生計」を一人でしなければならなくなり、途方に迷いました。「生きがい」は娘の成長とどんな苦難にも掛けずがんばっていた主人。そして「一日も早く解決を」と願っていた主人。本当に、本当に悔しかったと思います。「主人が空の上から私達を見ている」私はそう信じ、その意思を引き継ぎ頑張ってきました。あれから21年、戻

れるものならもう決たい。あの日に帰りたいと何度思ったことでしょう。決して裕福ではなかったけど、いつも笑いと団圓があった私の家庭。国労組合員であったことだけで「不採用」となり、2歳半であった娘がもう23歳となりました。「お父さんの仕事は何しているの」と聞かれ「国労闘争団員」?不思議がられたものです。娘もいろんなことを感じながら成長したと思います。人並みとまではいきませんが、何とか希望する道を進ませることができました。しかし、娘に主人が列車を運転している姿を見せてやることができなかつたことが、本当に悔やまれてなりません。無念の思いを抱いたままこの世を去った主人の墓前に「やっと解決したよ。私、頑張ったよ」と一日も早く報告できるように、これからも頑張ります。